

## 2018年度 入学試験問題

# 国語

## (第2回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ニッチというと、ビジネスの世界では、ニッチ市場やニッチ戦略というように、マーケティング用語として知られている。

ニッチとは、大きな市場ではなく、大きな市場と大きな市場との隙間にあるような、特定の小さな市場という意味で使われる。これはもともと生物学で使われていた用語が、マーケティング用語として広まったのである。

マーケティング用語として、ニッチという、「すきま」という意味合いが強いが、もともとは単にすきまを意味するわけではない。

「ニッチ」とは、もともとは、装飾品を飾るために寺院などの壁面に設けたくぼみを意味している言葉である。それが転じて、生物学の分野で「ある生物種が生息する範囲の環境」を指す言葉として使われるようになった。生物学では、ニッチは「生態的地位」と訳されている。

一つのくぼみに、一つの装飾品しか置くことができないのと同じように、一つのニッチには一つの生物種しか住むことができない。そして、すべての生物が自分だけのニッチを持っているのである。もちろん、大きなニッチを持つものもいれば、その隙間の小さなニッチを持つものもある。そして、そのニッチは重なりあうことがない。もしニッチが重なれば、ゾウリムシの実験に見たように、そこでは、激しい競争が起こり、どちらか一種だけが生き残る。

A 世の中のすべての生物が、それぞれのニッチを持っている。そして、ジグソーパズルのたくさんのピースがはまっていくように、たくさんの生物のニッチで埋め尽くされて「生物多様性」と呼ばれる世界が作られているのである。

植物の場合はどうだろう。

動物の世界では、よく似た生物種どうしがニッチを棲み分けている例がよく見られる。しかし、植物の世界を見ると、森にはたくさんの木々が生い茂っているし、野原にはたくさんの花が咲き乱れている。そして、同じ資源である光や水を利用している。

このように、植物の場合は一見すると、同じところにたくさんの植物が生えていて、動物のよう  
に、どのようにニッチをずらしているのかは明確ではないことが多い。しかし、さまざまな植物が共存しているように見えても、植物もまた ガウゼの ホウソクに シタガって、それぞれ居場所を分け合っていると考えられている。

B 木々が生い茂っているように見える森も、森の上の方に葉を茂らせている高い木と、森の下に広がる空間に葉を広げる ヒクイ木、そして、森の底で 木漏れ日を受けながら生えている草、というように空間を棲み分けている。

どこにでも生えているように見える雑草だが、よく観察してみると生える場所は決まっている。

道ばたに生えている雑草と、公園に生えている雑草はよく見ると種類が違<sup>ちが</sup>う。また、同じ道ばたでもよく踏<sup>ふ</sup>まれる歩道の真ん中と、踏まれ方が少ない道の隅<sup>すみ</sup>と、まったく踏まれない道の外側では、生えている雑草が違う。こうして環境によって棲み分けている。雑草は何気なく、どこにも生えているわけではないのだ。

同じように生えていても、ニッチを棲み分けている例は見られる。

ハルジオンとヒメジオンは、姿の良く似た雑草である。しかも、同じような場所に生えているので、なかなか見分けることができない。このハルジオンとヒメジオンは、共に北アメリカ原産の外来の植物である。

この二種は、同じような場所に生えているので、ニッチが重なっているように見える。

C、ハルジオンとヒメジオンは、時期をずらしている。

ハルジオンとヒメジオンの場合は、ハルジオンが春に咲く。そして、その後の初夏から秋に掛けてヒメジオンが咲くというように、ニッチをずらしていると考えられている。

次にタンポポの例を見てみよう。

よく知られているように、タンポポには外国からやってきた外来の西洋タンポポと、昔から日本にある在来の日本タンポポに大別される。実際には、西洋タンポポと呼ばれる中に、セイヨウタンポポやアカミタンポポなどいくつかの種類があり、日本タンポポの中にもカントウタンポポやカンサイタンポポなどいくつか種類があるが、ここでは <sup>d</sup> タンジュンに「西洋タンポポ」、「日本タンポポ」と表現することにしよう。

外来の西洋タンポポは、勢力を拡大している。これに対して、在来の日本タンポポはだんだんと数を減らしている。そのため、西洋タンポポが日本タンポポを圧<sup>あつ</sup>倒して追いやられているように見られることもある。

しかし、実際は少し違う。西洋タンポポと日本タンポポとは棲むニッチが異なるのである。

西洋タンポポと日本タンポポの特徴<sup>とくちょう</sup>を比較<sup>ひかく</sup>してみることにしよう。

まず、種子のサイズは西洋タンポポの方が小さく軽い。タンポポは風で種子を飛ばすから、種子が小さい西洋タンポポの方が、より遠くまで種子を飛ばすことができる。種子が小さいので、その分、種子の数を多くすることができる。そのため、西洋タンポポの方が、日本タンポポよりも種子数が多いのである。

また、日本タンポポは、ハチやアブなどが花粉を運んでこない<sup>と</sup>種子ができない他<sup>た</sup>殖<sup>しょく</sup>性<sup>せい</sup>であるのに対して、西洋タンポポは自分だけで種子を作ることのできる自殖性である。そのため、仲間がいなくても、ハチやアブなどの昆虫<sup>こんちゅう</sup>がいなくても、一株だけあれば種子を作ることができるのだ。

それだけではない、日本タンポポは春にしか咲かないのに対して、西洋タンポポは一年中、花を咲かせることができる。

そのため、西洋タンポポは次から次へと花を咲かせ、次から次へと種子を作つて、バラまくこ

とができるのである。

こうして見ると、どうも西洋タンポポの方が、日本タンポポよりも繁殖力はんしよくが旺盛おうせいで、強い感じがする。西洋タンポポが大繁殖して、繁殖力の弱い日本タンポポを追いやっているイメージも納得納得できる。

しかし、<sup>③</sup> 実際には違う。日本タンポポには日本タンポポの戦略があるのである。

タンポポを指標とした「タンポポ調査」と呼ばれるものが、よく行われている。西洋タンポポは都市化したところに多く分布する。これに対して、日本タンポポは、自然の残った田園地帯や郊外こうがいによく見られる。そのため、西洋タンポポと日本タンポポの分布を見ると、環境が都市化しているかどうかがわかるのである。

じつは、日本タンポポは自然が豊かで、他の植物が生えているところでは有利さを発揮する。たとえば、日本タンポポは西洋タンポポよりも種子が大きい。確かに遠くまで飛ばすという点では大きくて重い種子は不利である。しかし、大きくて重い種子からは、大きな芽を出すことができる。これは他の植物の芽生えと競まきって伸びるためには、必要なことだ。さらに、他の花の花粉と交配することで、バラエティに富んださまざまな子孫を残すことができる。多様な子孫を残すということも、多様な環境があり、さまざまな病害虫に対処しなければならぬ自然の中で生き残るには大切なことである。

**D**、重要な戦略は「春にしか咲かない」ということである。日本タンポポは春に咲いて、さつさと種子を飛ばすと、根だけ残して地面から上は自ら枯かれてしまう。これは、冬眠とうみんの逆で夏に地面の下で眠ねむっているので、「夏眠」と呼ばれている。

夏が近づくと、他の植物が枝葉を伸ばし、生い茂る。そんなところで、小さなタンポポが頑張がんばつても、光は当たらず生きていくことができない。そこで、強い植物との無駄むだな争まじいを避さけて、地面の下でやり過ごすのである。

ライバルが多い夏にナンバー1になることは難しいから、ライバルたちが芽を出す前に、花を咲かせて種を残すという戦略なのである。

一方、西洋タンポポは日本の四季を知らないから、他の植物が生い茂る夏の間も、葉を広げ花を咲かせようとする。そのため、西洋タンポポは枯れてしまい、生きていくことができないのだ。同じように枯れているように見えても、自ら葉を枯らして眠っている日本タンポポはまったくダメージがない。一年中咲いている西洋タンポポに比べて、春しか咲かない日本タンポポは劣おとっているようにも思えるが、じつは戦略的だったのだ。

このように、西洋タンポポは他の植物が生えるような場所には生えることができない。だから、その代わりに他の植物が生えないような都会の道ばたで花を咲かせて、分布を広げているのである。西洋タンポポが広がり、日本タンポポが少なくなっているという現象は、単に他の植物が生えるような元々の日本の自然が減っているからだったのである。

どんな生き物もナンバー1になれるニッチがなければ生きていくことができない。

しかし、すべての生き物にとって、ニッチは約束された安住の地ではない。実際には、さまざまな生き物がニッチを奪い合って競い合う。ニッチを守るためには、常にナンバー1でありつづけないければならないのだ。

たとえば、高校野球で日本一の栄冠に輝くのは大変である。都道府県で優勝することは全国優勝に比べれば易しいが、それでも大変なことだ。市町村で優勝と言えば、もう少し易しくなる。さらに町内で優勝するとなれば、ライバルはかなり少なくなるだろう。このように範囲を狭めていけば、ナンバー1になりやすくなる。

さらに野球でまともに勝負するのではなく、打率やベースランニングの速さで競ったり、キャッチボールの正確さを誇ったり、少し勝負の内容をずらせば、ナンバー1になりやすい。スポーツはできなくても、プロ野球の選手の名前を誰よりも言えるというナンバー1もいるかも知れない。このように、条件を小さく細かく絞り込んでいけば、ナンバー1になれるチャンスが生まれてくるのである。そして、まともに競い合うことを考えるよりも、条件をずらしながら、ナンバー1になれる場所を探した方が良い。

そのため、多くの生物は小さなニッチを確保して、それを守っている。ニッチが小さいということは、たくさんの生物がニッチを分け合うことができる。

だからこそ、これだけ多くの生物が自然界に共存しているのである。

(稲垣采洋『植物はなぜ動かないのか』より)

※ゾウリムシの実験……ゾウリムシとヒメゾウリムシという二種類を一つの水槽で一緒に飼った実験。水やエサが十分にあっても一種類が生き残り、もう一種類は減ってしまうという結果になった。

※ガウゼのホウソク……生物の世界では、ナンバー1しか生き残れないというもの。

問1 —— 線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん A D にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- |   |   |       |   |      |   |      |   |     |
|---|---|-------|---|------|---|------|---|-----|
| 1 | A | こうして  | B | たとえば | C | しかし  | D | そして |
| 2 | A | つまり   | B | たとえば | C | ところが | D | また  |
| 3 | A | すなわち  | B | だから  | C | けれども | D | そして |
| 4 | A | このように | B | だから  | C | だが   | D | つまり |

問3 この文章を大きく三つの段落に分けたとき、第二段落と第三段落のはじまりはどこになりますか。それぞれはじめの五字をぬき出しなさい。

問4 ——線①「『生物多様性』と呼ばれる世界」とありますが、これはどのような世界のことですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 力の弱い動物が自らの生存のために争いを繰り返<sup>く</sup>返し、小さいながらも自らの居場所を確保している世界のこと。
- 2 食物連鎖<sup>れんさ</sup>によって生態系が整い、肉食動物・草食動物・植物の総個体数のバランスが保たれている世界のこと。
- 3 動物や虫、雑草などのさまざまな生き物が、自らの生存可能な場所を見つけ、そこに適応しながら生きる世界のこと。
- 4 競争に負けた動物が、劣悪<sup>れつあく</sup>な環境でも生きられるように進化し、どのような場所にも生物が存在している世界のこと。

問5 ——線②「それぞれ居場所を分け合っている」とありますが、どのように分け合っているのですか。その例としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 同じ森で生息している植物であってもその空間の上下左右の広がりを利用して棲み分けをしている。
- 2 同じ種類と見なされがちな植物種であってもその地域の環境に適應するかどうかによって棲み分けをしている。
- 3 同じ種類の植物種同士であっても子孫を残すという目的のために種子を飛ばす場所を広げることで棲み分けをしている。
- 4 同じ場所に生息している植物であっても自らの開花の季節をずらすことで棲み分けをしている。

問6 ——線③「実際には違う」とありますが、これはどういうことですか。それを説明した次の文の空らん  にあてはまることばを文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

西洋タンポポが日本タンポポを追いやっているように見える現象は、タンポポのせいだけではなく、 ことも原因だと考えられるということ。



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校五年生の室井さつきは、父親の仕事の関係で、札幌から父の実家がある沢北町に引っ越して、新たな生活を送っていた。ある日のこと、さつきは同級生の小山内理子から、「ジャンプ見ない？」と誘われる。沢北町では町をあげてスキーのジャンプ競技に力を注いでおり、理子は将来のオリンピック選手と周囲から期待をかけられる実力の持ち主であった。以下の文章は、理子の練習を見学に行ったさつきが、理子を指導する永井コーチから「君も飛んでみるかい？」と誘われて、初めてジャンプに挑戦する場面である。

スキー板の前を開き、逆ハの字のようにして、雪を踏みしめるように一步一步コーチに続いていたさつきの背に、声が投げかけられた。

「飛んでみるの？」

振り向くと理子だった。ゴーグルを上げていて、涼しげな目がそのまま見える。

「うん、コーチがやってみないかって」

「いいね」

理子はリフトの方へは行かず、斜面を登るさつきの後についてきた。

「理子ちゃんはどう、と、飛ばないの？」

「飛ぶよ。でも、ちょっと一休み」

いつも凜々しい理子の表情に、<sup>①</sup>ちらりと、いたずらっぽさがよぎった。

二人の横を、飛び終わった子どもが滑り降りていく。身長はさつきの胸くらいまでしかなさそうだ。

「今の子は二年生だよ」

教えてくれた理子に、少し足がだるくなってきたさつきが応じる。「そうなんだ、ちっちゃかったもんね。かわいい」

「私がジャンプ始めたときも、あれくらいだったかな」

「理子ちゃんも、最初は、この小さな台から始めたの？」

「もちろん」

さつきには一番大きな台で、男の子たちよりも遠くへ颯爽と飛ぶ理子に、そんなときがあったとは、なかなか想像しづらかった。

「最初からいっぱい飛べたの？」

<sup>②</sup>理子はくすつと笑った。「どうだったかな？」

「覚えてないの？」

小さな踏み切り台のそばにいる大人に、永井コーチが話しかけている。「二人、体験の子を飛ばせたいんだが」

「はい、わかりました」



その人がさつきのほうを見た。少し遠かったが、微笑みかけてくれているのはわかった。それからその人は理子に「あれ、理子ちゃんもこれ飛ぶの？」と冗談めいた口調で言った。

「いえ、見るだけです」

「理子が連れてきた子なんだよ」

永井コーチがフオローする。「理子が見込んだんだから、有望だよ」

「理子ちゃんが。そりゃあ見ものですね、永井さん」

へー I へ

大人二人の会話に、さつきはややドキドキした。

③（上手く飛ばなきゃ駄目かな？）

「ねえ、早く登ってよ」

さつき滑り降りてきた子が、もう追いついてきている。ゴーグルの中で眼鏡をかけているその子は、さつきと目が合うと無邪気に笑った。

一生懸命足を動かし、ようやく台の上まで辿りついた。さつきを急かした小さな子には、結局追い越されてしまい、その子がもう一度飛んでいくのを、さつきはちよつと離れたところから眺めた。

「じゃあ、次さつきちゃん、行ってみようか」

永井コーチに手招かれるまま、さつきはスタート地点に立つ。

（えっ）

とたんに、身がA。下からや、横から眺めていたよりもずっと、斜面は急に感じられる。

理子が飛んでいた台に比べればおもちゃみたいなカンテも、上からまっすぐ見下ろせば明らかに異物だった。

（あの、でつぱりのせいで、下が全部見えない）

全部見えないというのは、思いがけないほどの恐怖を呼んだ。ただの直滑降ならまだ耐えられたかもしれない、たとえ急斜面であっても。

（やだ、どうしよう）

さつきの心臓は激しく鼓動し、胸が押しつぶされたように浅い息しか吸えない。

（こわい）

動き出せない。

（こわい、こわい）

そのとき、カンテから緩い向かい風が吹きあげてきて、ヘルメットから出ているさつきの前髪をさらりと撫でた。

—— 来い。

「えっ？」

④ なにかの声を聞いた気がした。細かな氷の粒が額に当たる。

——飛んで来い。

ふいに、背を押された。

「きゃっ」

さつきは小さな悲鳴をあげたが、スキーはもうアプローチを滑り出している。どんどん加速する。顔にぶつかる冷気。そして圧力。息ができない。

カンテに乗り上げる。

——飛べ。

⑤ 大きな力がさつきの体を抱きしめて持ちあげ、スキー板の下にもぐりこんだ刹那、さつきの視界はほんのひとときだけ真っ白になった。

「初めてにしては上出来だよ」

ランディングで後方に尻もちをつき、お尻をつけたままずると下ってようやく止まったところに、永井コーチと理子がやってきた。

「どこか痛いかい？」

⑥ 尋ねる永井コーチに、さつきはゆるゆると首を横に振る。

スタートのところで感じたものとは違う高鳴りが、さつきの中で跳ねまわっていた。心配げに覗きこむ永井コーチに、どうそれを説明しようかと考え、できそうにないことをすぐに悟る。

落ち着けと自分に言い聞かせて、胸を手で押さえ息を吐きだす。

そこに、手袋をはめた右手が差し出された。理子の手だった。

「立てる？」

「……うん」

頷いて立ち上がる。目が合うと、理子は一こつとした。「さつきちゃん、どうだった？」

「え……どう、って……」

「楽しかった？」

楽しかったか。

突然さつきの頭の中に、この数分間に起こった様々なことがわき上がり、渦巻いて、それらが溢れてしまいそうになり、軽くパニックになった。緊張、恐怖、背を押された驚き、カンテへ向

かって疾走する自分。

それから。

吹き上げる風の声。

飛べ、そう言った。

ほんのひとときだけだったはずなのに、そのひとときがあまりに鮮烈に心に残っている。

（私、飛んだんだ）

一瞬世界が真っ白になった後は、なにも見えなくて聞こえなかった。雪と風の音以外は。

(飛んだ)

あの、不思議な感じ。スキーの下にはなにもないのに、浮かんている。どきどきしていた鼓動は、飛んでいるときだけ、ひどくゆっくり打った気がする。なぜ浮かぶのか、なぜ飛べるのか、さっぱりわからない。けれども、自分を包んだ風が助けてくれていることだけは、はっきりとわかった。

永遠のような一瞬に感じたすべてを、言葉を使って表すことは、さつきにはできない。

でも、もう一度理子の笑顔を見て、さつきは自分でも知らぬまま、思いつきり首を縦に振ったのだった。

へ Ⅱ へ

「……楽しかった」

(自分が違うなにかになったみたいで)

「楽しかった、理子ちゃん」

⑦ (飛ぶってあんな感じなんだって、知らなくて)

「楽しかった、私飛べたよね、飛べたよね理子ちゃん」

(あのまま飛んでいられたら、どんなに)

理子は力強く頷いた。「飛べていたよ、さつきちゃん」

へ Ⅲ へ

それを見て、さつきは思い当たった。

「ねえ、理子ちゃん。もしかしてスタートのときに背中を押したのって」

「ごめんね」理子は両手を口の前あたりで合わせた。「私が押したの」

自分の練習を中断して、一緒に斜面を登ってきたときのいたずらっぽい笑顔を思い出す。

「ううん、いいよ。押されてなかったら、滑れなかったかもしれないし」

「やっぱり、ちよつと怖かった？」

さつきは正直に頷く。

「うん……なんか想像していたよりもずっと怖くて」答えつつ、さつきはふと理子の言い回しに気づく。「やっぱり、って？ みんなそうなの？」

「私も最初は怖かった」

理子は隠さなかった。「同じように、スタートのところで動けずいたら、永井コーチが背中を押したの」

「そうだったんだ」

強引ともいえそうな理子のやり方だったが、しかし腹は立たなかった。それよりもさつきは、初めて宙に浮いた永遠とも思えるほんの一瞬が、体中を満たして、まだどきどきしていた。

「もう一回、飛んでみるかい？」

優しく尋ねた永井コーチに、さつきは一も二もなく頷いていた。

「飛びます、もう一回やってみます」  
理子が心底嬉しそうに笑った。

へ IV へ

結局さつきは、体験と言いつつも、一番小さな台を八回飛んだ。

二度目からは誰の後押しも必要としなかった。それなりに長く飛べたときもあれば、すぐに降りてしまうこともあったけれど、飛ぶたびにさつきはやっぱり今まで味わったことのない、大きな力に抱かれながら、違う世界の端っこを垣間見るような、不思議な感覚にとらわれた。

その感覚はさつきを激しく魅了した。

そして、下方から吹き上げてくる風。

（声が聞こえた気がしたんだ）

スキー板など、借りたもの一式を返すとき、さつきの心は決まっていた。

「私も、入団したいと思います」

永井コーチは「一晩、ゆっくり考えて、お父さんとお母さんにも相談して、それでも入りたかったら、もう一度来なさい」と、柔らかかに諭した。

コーチの言葉に素直に頷きながら、さつきは自分の意思は変わらないだろうと確信していた。

（あんな世界があるなんて知らなかった）

さつきは胸に手を当てた。思い返すたびにドキドキがよみがえる。

（中略）

小学校の校舎が近づいてくる。職員室だけに明かりが灯っている。ハルニレの巨木が黒い影になって、風に裸の枝を揺らしている。

「ねえ、理子ちゃん」

さつきは思い切って尋ねた。

「どうして私を誘ってくれたの？」

「ああ」

理子はさつきをちらりと見やり、それからハルニレに視線を移してからうつむきがちに微笑した。

⑧「さつきちゃん、文句を言っていたから」

「え、なにに？」

思い当たる節がなかった。

（理子ちゃんになにか言ったっけ？）

戸惑いを察知したのだろう、理子はすぐさま「私にじゃなくてね」とまっすぐ前を向いた。

「向かい風なんて、大っきらい——そう言っていたでしょう？ ハルニレのところまで」

「あ」

そういうえば、そんな独り言を口にしたかもしれない。さつきは認めた。「うん、言った気がする」「さつきちゃん、ジャンプってね」

理子はあるときのさつきがしたように、雪玉を丸めて、ハルニレの幹に優しく投げた。「追い風より、ちょうどいい向かい風のほうが、良い記録が出るの」

「えっ」

「飛行機もそう。飛ぶときは向かい風に向かって滑走する……これは圭介が言っていたんだけどね」

もう一度丸めた雪玉を、今度は幹にぶつけずに、理子は祈るいのようにそれを口元に押し当てた。  
^ V ^

「私はね、スタートゲートにいるとき、いつも待ってる。いつも来いって思ってる」

ちょうどいい向かい風を、向かい風が自分を呼ぶのを——。唇の先の雪玉をゆっくりとかすように、理子は言った。

「向かい風は、大きく飛ぶためのチャンスなんだよ」

(乾ルカ『向かい風で飛べ!』より)

問1 —— 線①「ちらりと、いたずらっぽさがよぎった」とありますが、これは、さつきに対してどのような行動となってあらわれますか。それがわかる部分を、文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問2 —— 線②「理子はくすつと笑った。『どうだったかな?』とありますが、この理子の言動はどういうことをあらわしていますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 はじめてのジャンプでは、怖さもあり決してうまく飛べなかったことを、さつきのことばで思い出し、笑ってはぐらかしたということ。
- 2 さつきが緊張のあまり変な質問をしてきたので、どうこたえていいかわからなくなり、無理に笑ってみせてあいまにしたということ。
- 3 自分は最初からうまく飛べたと正直に言ってしまうと、さつきに自信を失わせることになるので、わざと忘れたふりをしたということ。
- 4 さつきが自分よりも遠くに飛びたいと思っていることを見ぬいたので、少しでも緊張させないようにと考え、笑顔で応じたということ。

問3 ——線③「『ねえ、早く登ってよ』」とありますが、この子のことはどのような気持ちから出たことばだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 女であるさつきのことをじゃま者と感じてしまう、わがままで自分勝手な気持ちから出たことば。

2 初めて飛ぶさつきのことをさりげなく励まそうという、優しい思いやりの気持ちから出たことば。

3 自分自身が早く飛びたくてたまらないという、子どものあどけない素直な気持ちから出たことば。

4 ジャンプでは自分のほうが先輩であると、さつきに対して威張ろうとする気持ちから出たことば。

問4 空らん A に入ることばとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 なじんだ

2 すさんだ

3 すくんだ

4 ほろびた

問5 ——線④「なにかの声」とありますが、理子はこの声をどういう声と考えていますか。「声」につながるように文中から十字でぬき出しなさい。

問6 ——線⑤「大きな力がさつきの体を抱きしめて持ちあげ、スキー板の下にもぐりこんだ刹那」とありますが、さつきにとって、この未知の瞬間は、どのように言いかえられていますか。文中から二十字でぬき出し、はじめとおわりの三字で答えなさい。

問7 ——線⑥「スタートのところで感じたものとは違う高鳴り」とありますが、この時点と「スタート」の時点とでさつきの気持ちはどのように変化しましたか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 スタートの時に漠然と感じていた恐怖や期待感が、案外上手に飛べたことで、この先続けていけばもっと遠くまで飛べるようになるという強い確信に変わった。

2 スタートの時に思わず感じた怖さや緊張が、なんとか飛べたことで、一気に解放されると同時に、押し寄せてくる言葉にならないさまざまな思いへと変わった。

3 スタートの時にもそれなりに恐怖や威圧感のようなものを感じたが、実際に飛び終わったときには、ことばにできないぐらいの大きな恐怖や緊張感に変わった。

4 スタートの時には、まるで別世界のこととして感じられた怖さや驚きや緊張であったが、それが一瞬の空白をささみ、現実世界のことという感覚に変わった。

問8 ——線⑦「(飛ぶってあんな感じなんだって、知らなくて)」に関して、飛んでいるときのさつきを夢中にさせる不思議な感じが述べられていますか、それはどのような感覚ですか。文中から三十五字でぬき出し、はじめとおわりの二字で答えなさい。

問9 ——線⑧「『さつきちゃん、文句を言っていたから』とありますが、この理子のことばからはどのような意図が読み取れますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 さつきが向かい風を気に入らないものとしているのを見て、悪い条件や欠点に目を向けても意味はないので、それにかわる別のいい面を探し出していくような考え方をすべきだ、ということ伝えようとした。

2 さつきが向かい風なんて大っきらいと言ったのを聞き、今の生活環境を嫌い、なじめないでいることを感じたので、ジャンプを通じて、楽しく充実した生活を送ることができると、ということ伝えようとした。

3 さつきが向かい風にやつあたりをしているのを見たことで、クラスの中に友達がいなかったことを察したので、ジャンプの見学を口実にして誘うことで、自分と友達になってほしい、ということ伝えようとした。

4 さつきが向かい風に文句を言っているのを聞き、自分が関わっているジャンプという競技を見せることで、むしろ困難や不利に思える状況こそがよい結果を得ることにつながる、ということ伝えようとした。

問10 次の一文は、もともと文中の空らんへⅠ～Ⅴのいずれかにあつたものが、どこに入れるのがふさわしいですか。後から一つ選び、番号で答えなさい。

それから理子は、よかった、と自分の胸に手をやった。

1 へⅠ Ⅱ 3 へⅢ 4 へⅣ 5 へⅤ

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

未確認飛行物体

入沢 康夫

① 葉罐<sup>やかん</sup>だって、  
空を飛ばないとはかぎらない。

水のいっぱい入った葉罐が  
夜ごと、こっそり台所をぬけ出し、  
町の上を、

② 畑の上を、また、つぎの町の上を  
心もち身をかしげて、  
一生けんめいに飛んで行く。

天の河の下、渡<sup>わた</sup>りの雁<sup>かり</sup>の列の下、  
人工衛星の弧<sup>こ</sup>の下を、  
息せき切って、飛んで、飛んで、  
(でももちろん、そんなに早かないんだ)

そのあげく、

③ 砂漠<sup>さばく</sup>のまん中に一輪咲いた淋<sup>さび</sup>しい花、  
大好きなその白い花に、  
水をみんなやって戻<sup>もど</sup>って来る

(飛高隆夫・野山嘉正編『展望 現代の詩歌』より)



問1 — 線①「空を飛ばないとはかぎらない」とありますが、この部分についての説明を完成させるために、次の空らん  A  C にあてはまることばを入れなさい。ただし、 A は、詩全体から三字でぬき出し、 B ・  C は漢字三字でそれぞれ考えて答えるものとなります。

本来「葉罐」が空を飛ぶことなどありえない。実際に飛んでいる姿を見た人もいないのだから、まさに  A なのである。その「葉罐」が、空を飛ぶと考えることは、身近なものに対して持っている  B を捨て、 C を働かせることで、詩の楽しさやすばらしさを味わうことができるのである。

問2 — 線②「心もち身をかしげて」とありますが、その理由としてふさわしいと考えられるものを二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 砂漠に咲く花を救い出す方法をけんめいに考えているため。
- 2 水がいったい入っているので慎重に飛ばなくてはならないため。
- 3 雁たちの列についていくことで道に迷わないようにするため。
- 4 身をかしげることによってよりはやく飛ぼうとしているため。
- 5 砂漠の花のもとに無事に着けるか心配しながら飛んでいるため。

問3 — 線③「水」が何をあらわしているかを説明した次の文の空らん  にあてはまることばを漢字二字で考えて答えなさい。

白い花に対する強い  のあらわれ。

問4 この詩全体にわたって使われている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 省略法
- 2 反復法
- 3 対句法
- 4 擬人法
- 5 倒置法

4 次の各問いに答えなさい

問1 次にあげる漢字の成り立ちとして最もふさわしいものを、後の1～4から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- ① 料      ② 府      ③ 手      ④ 中      ⑤ 鳥      ⑥ 閣      ⑦ 安

1 象形〔物のかたちをそのままかたどった絵画的なもの。〕

例 山・川

2 指事〔物事の間接を、点や線などの記号によって表したもの。〕

例 二・上

3 会意〔二つ以上の文字を組み合わせて、別の新しい意味を表したもの。〕

例 信 ↑ 「人」と「言」を組み合わせて

4 形声〔意味を表す文字と音を表す文字を組み合わせたもの。〕

例 江 ↑ 「水」を表す「氵」＋音を表す「工」

問2



飛は、鳥が、羽を開いて舞い上がることをあらわす象形文字です。この漢字を楷書で書いたときの画数は何画ですか。漢数字で答えなさい。